

不登校対応の取組について

I 島根県の不登校及び不登校傾向児童生徒の状況

1 全体的な状況

① 不登校児童生徒数の推移

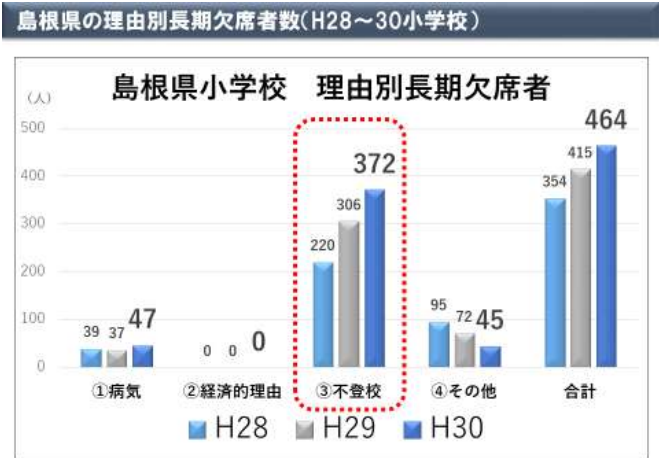
○ 不登校児童生徒数

【小学校】

- ・ 直近の3年間、増加傾向にあり、特にH28年度以降の増加率が高い。
- ・ 不登校児童数はH29年度に比べH30年度は約1.2倍増加している。
306人 → 372人 (66人増)
- ・ 学年別に見ると、学年が上がるにつれて、不登校児童数が多くなっている。
- ・ 特に高学年で増加率が高いが、低・中学年でも増加傾向にある。

【中学校】

- ・ 不登校生徒数はH27年度以降増加傾向にあり、特にH29年度からH30年度にかけては、増加が著しい。
576人 → 652人 (76人増)
- ・ 学年による差や増加率の傾向は、小学校ほど顕著ではないが、H29年度からH30年度にかけては、特に3年生で増加が著しい。

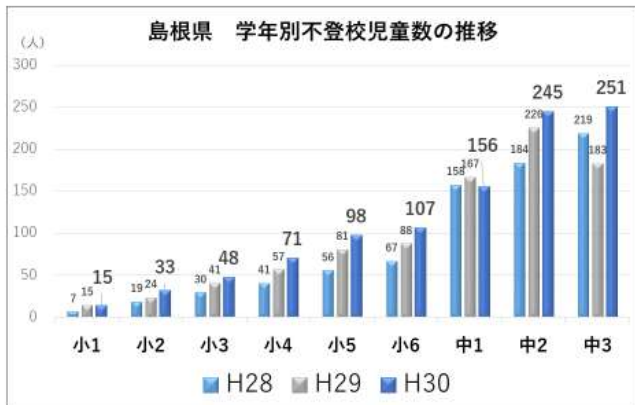


島根県「不登校及び不登校傾向の児童生徒に関する調査」



島根県「不登校及び不登校傾向の児童生徒に関する調査」

島根県学年別不登校児童生徒数(小・中学校)H28～H30



島根県「不登校及び不登校傾向の児童生徒に関する調査」

② 不登校児童生徒数の割合

○ 全児童生徒数に対する不登校児童生徒数の割合

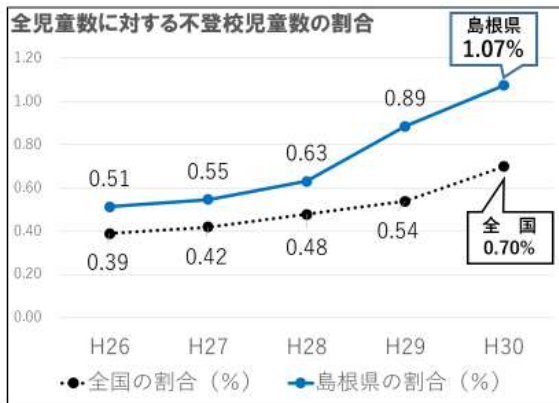
【小学校】

- ・ 全国の割合も増加傾向にあるが、H29以降、特に全国と比較して増加率が高い。
- ・ 直近の5年間、常に島根県は全国よりも高い割合で推移している。

【中学校】

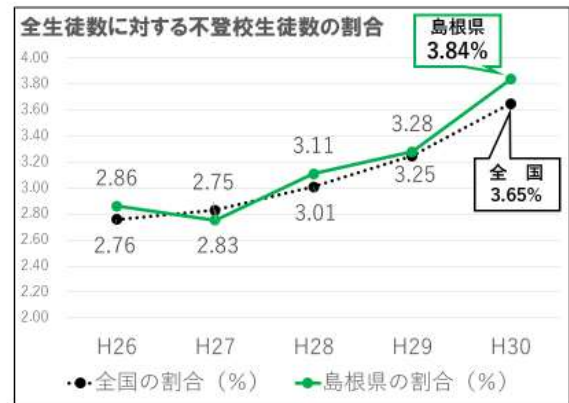
- ・ H27年度は全国より低いが、その後は全国の割合を上回り、特にH29年度からH30度にかけての増加率が高い。
- ・ 全校生徒数に対する割合は、小学校よりかなり高い。(小：1.07% 中：3.84%)

不登校児童生徒数の割合(小学校)



19

不登校児童生徒数の割合(中学校)



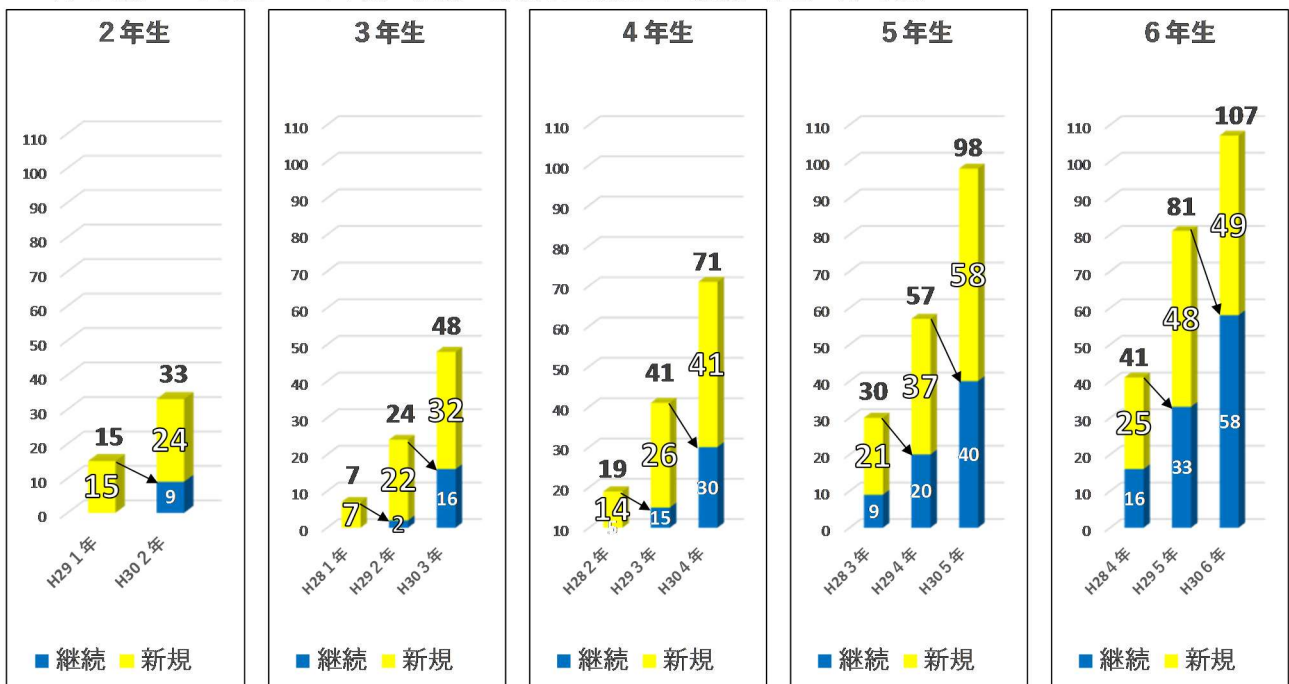
20

2 継続・新規不登校児童生徒の状況

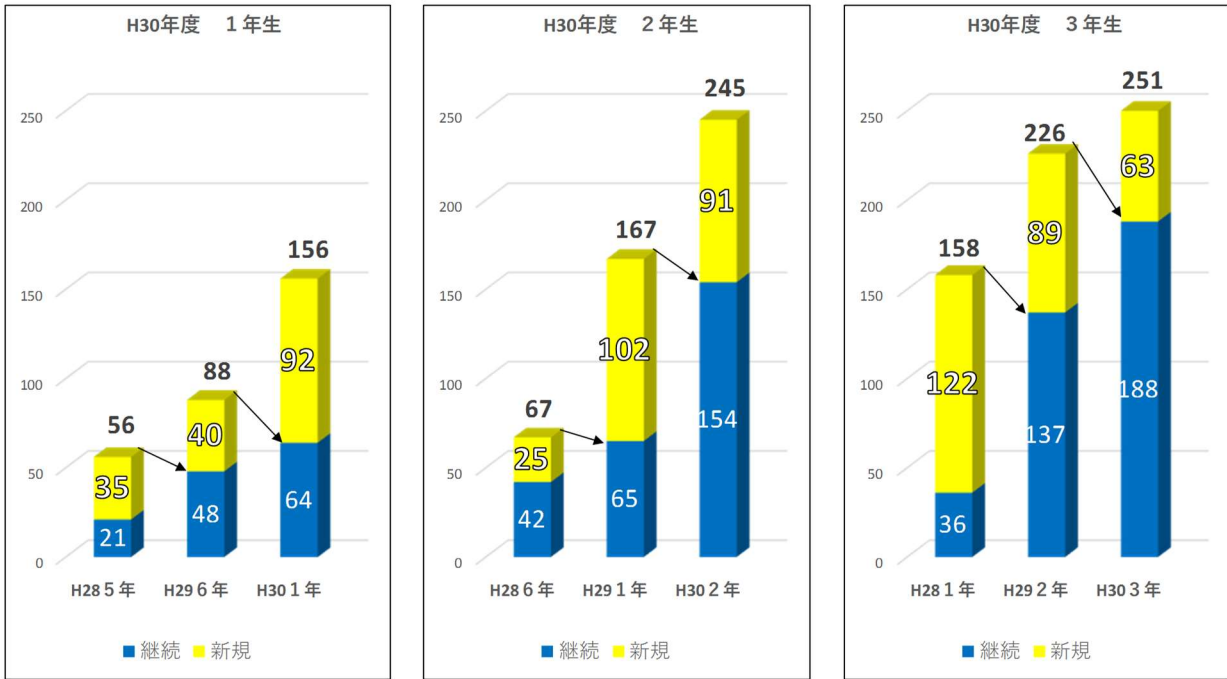
① 継続数・新規数の考え方

- ・ 前年度も不登校であった児童生徒数(継続数)と、前年度は不登校でなかった児童生徒数(新規数)に着目した考え方。
- ・ 継続数と新規数を区別して見ると、不登校児童生徒数の総数とは異なる状況が見えてくる。

【小学校】H28年度～H30年度の継続・新規不登校児童生徒数の推移(学年別)

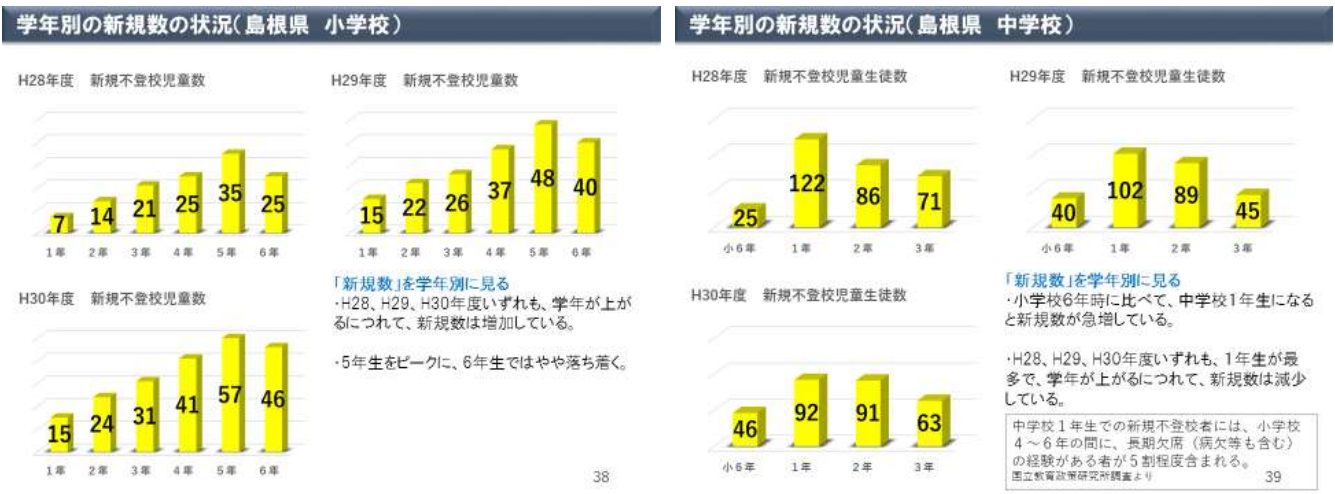


【中学校】H28年度～H30年度の継続・新規不登校児童生徒数の推移（学年別）



② 継続数・新規数の状況

- ・ 3年間の継続数の推移に着目すると、小学校・中学校ともに、全学年で継続数は減少している。つまり、前年度不登校であった児童生徒のうち、一定数は毎年不登校の状況が改善され、登校するようになっている。
 - 不登校対応による一定の成果。各校の取組、対応事業等による成果。
- ・ ただ、減少した継続数に新規数が積み上がることで、総数としては増加している。

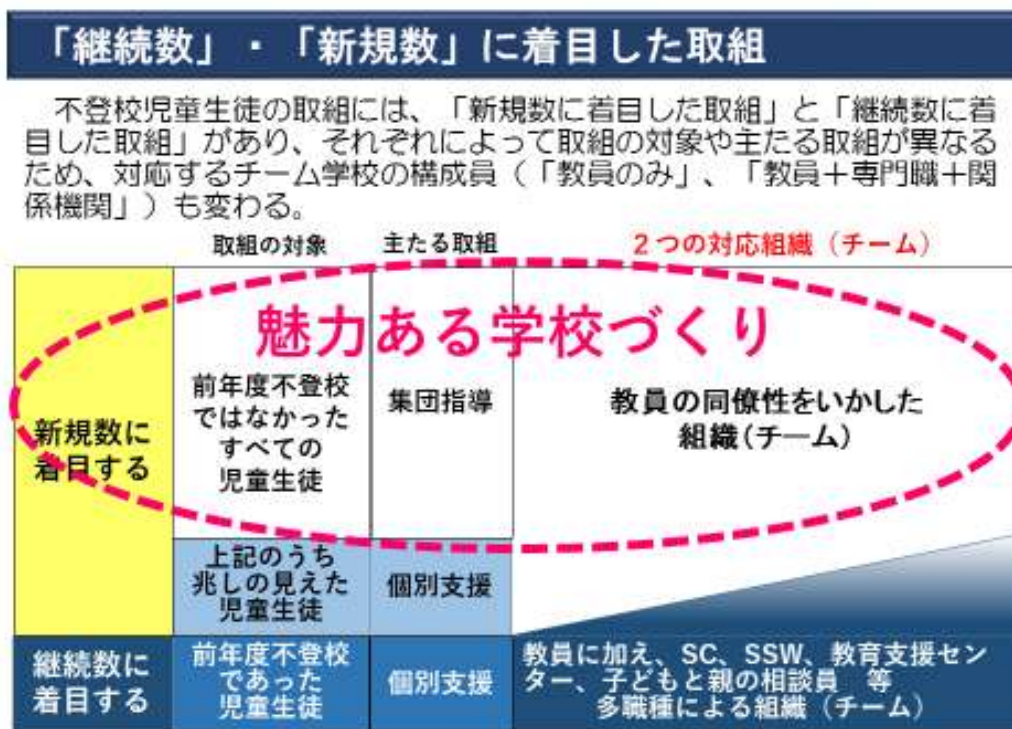


③ 新規数の状況

- ・ 学年別の新規数に着目すると、小学校では学年が上がるにつれて増加する傾向にあるが、ピークは5年生で、6年生になると新規数は少し落ち着く。
 - 6年生は、学校において自己有用感を味わえる機会が増える。卒業に向けて、あるいは中学校進学に向けての見通しが持てる。
- ・ 中学校では新規数のピークは1年生で、その後、学年が上がるにつれて減少している。
 - 1年生は新しい環境、集団への適応、学習内容や学習形態の変化への適応に難しさがある。
- ・ 中学校1年生の3年間の新規数を比較すると、減少傾向にあることから、小中の連携の充実が伺える。

II 不登校対応の取組 ～調査結果の活用～

(考え方)



不登校数を減らす取組として、継続数・新規数に着目して考えた時に、継続数は各学年で減少の傾向にあり、不登校への初期対応（早期発見、早期対応）・自立支援については、一定の成果が見られる。専門家を含めた多職種による「チーム学校」としての対応、支援の成果であると考えられる。

しかし、不登校状態にある児童生徒（継続数）が登校するようになるのは容易なことではない上に、登校が好ましい選択肢ではないケースもある。あくまでも社会的自立を見据えた、個に応じた支援が必要である。

そこで、不登校を減らす取組を推進するには、これまでどおり継続数を減らす取組とともに、新規数を抑える取組（＝新たな不登校を出さない取組）が必要である。

今後の取組として

1 未然防止の取組について周知徹底を図る

○ 引き続き未然防止の取組の重要性について周知徹底を図っていく。

（ポイント）

- ・ すべての児童生徒が、学校（学年、学級）を魅力ある場所と感じられるようにする。
→ **「魅力ある学校づくり」**
- ・ あらゆる教育活動で、**「居場所づくり」**（教職員主導）・**「絆づくり」**（児童生徒が主体、教職員の役割は場と機会の設定）に取り組む。
- ・ 「学校が楽しい・みんなで何かをするのは楽しい・授業に主体的に取り組んでいる・授業がよくわかる」という児童の視点を大切にする。

不登校の新規数を抑制する 「魅力ある学校づくり」に取り組む

- ①「居場所づくり」と「絆づくり」の違いを理解し、バランスよく取り組む
- ②行事だけでなく、授業をはじめとするあらゆる教育活動で取り組む



50

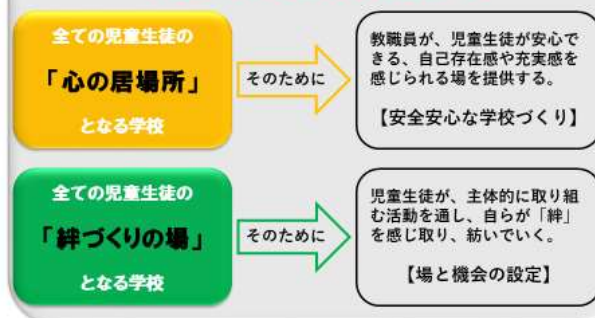
日々の学校生活の改善から 未然防止は始まる

具体的には、**わかる授業づくり**を進める、全ての児童生徒が参加・活躍できる**授業を工夫する**、といったことから始めましょう。

児童生徒が学校で過ごす中で一番長いのは授業の時間です。授業が児童生徒のストレスになっていないか、授業の中で児童生徒のストレスを高めていないか、言い換えれば、**授業中に児童生徒の不安や不満が高められていないか**というのは、授業改善の大きなポイントです。

生徒指導リーフ増刊号 国立教育政策研究所 52

あらゆる教育活動で



51

「自己有用感」とは

自分に対する他者からの評価が中心

人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自己と他者(集団や社会)との関係を自他ともに肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子ども自身に目標や工夫する点、努力する点などを考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが「認める」という行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。

生徒指導リーフ18 国立教育政策研究所 42

2 不登校児童生徒数「0」の学校の調査・分析

1) 島根県学力調査における「生活・学習に関する意識調査」(対象学年：第5学年、第6学年)の結果分析

・着目する質問項目(案)

- ① ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある。
- ② 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。
- ③ 自分にはよいところがあると思う。
- ④ 将来の夢や目標をもっている。
- ⑤ 自分の努力はまわりの人から認められていると思う。
- ⑥ 人の役に立つ人間になりたいと思う。
- ⑦ 家の人と学校での出来事について話をする。
- ⑧ 学校に行くのは楽しいと思う。
- ⑨ 学級のみinnで協力して何かをやりとげ、うれしかったことがある。
- ⑩ 自分の考えや気持ちを理解してくれる友達がいる。
- ⑪ 授業では、自分の考えを発表する機会を与えられていると思う。
- ⑫ 授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていると思う。

2) 不登校児童生徒数「0」の学校に係る学校訪問の実施

- ・ 不登校の未然防止において効果を上げていると考えられる学校体制や取組状況（魅力ある学校づくり）、不登校傾向児童への初期対応体制などに関して管理職等との協議
- ・ 学校訪問対象小学校
平成28年度調査から平成30年度調査において不登校児童生徒が在籍していない小学校のうち児童数が150人以上の規模の小学校

おわりに…

魅力あるよりよい学校づくり



**いじめ、暴力行為等問題行動を
許さない安全安心な学校づくり**

あらゆる教育活動をとおした「居場所づくり」や「絆づくり」の取組により、学校がどの児童生徒にとっても「意味のある大切な場」となるために、『魅力ある学校づくり』を推進していきましょう。